

Title	ロレンスの性・猥褻・検閲観と『チャタレー』裁判
Author(s)	奥村, 透
Citation	英文学評論 (1991), 62: 1-17
Issue Date	1991-09
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/RevEL_62_1">https://doi.org/10.14989/RevEL_62_1</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# ロレンスの性・猥褻・検閲観と 『チャタレー』裁判

奥村透

(1)

およそ近代の作家でD.H. ロレンスほど官憲の検閲に悩まされた作家は居まい。1915年の *The Rainbow* の押収から1950年の伊藤整訳『チャタレー夫人の恋人』（小山書店刊）をめぐる裁判にいたるまで、彼が如何に多くの検閲と闘わなければならなかったかは、Harry T. Moore の編んだロレンスのエッセイ集、*Sex, Literature and Censorship* に附されたムーアの序文 ‘D. H. Lawrence and the “Censor Morons” ’ を見れば一目瞭然である<sup>(1)</sup>。この事実はヴィクトリア朝以来続いてきた性を卑猥で汚いもの、恥ずべきものとしてタブー視するコンヴェンショナルな考え方にロレンスが真向から挑戦し、性を本来の健康できれいなものにしようと必死に闘ったことを物語るものに外ならない。そしてその結果は、彼の死後三十年後の1960年における、*Lady Chatterley’s Lover* をめぐっての検察側とペンギン・ブックス社およびその弁護側との裁判における、ペンギン・ブックス社の圧倒的な勝利となる。つまりロレンスの考え方の正しさが、死後三十年にしてようやく世界に認められることになったのである。

それではロレンスの性や猥褻に対する考え方とはどのようなものであろうか。それは彼が1928年に書いた ‘Sex Versus Loveliness’<sup>(2)</sup> や、1929年に書いた ‘Pornography and Obscenity’<sup>(3)</sup> などのエッセイを見ればよくわかる。‘Pornography and Obscenity’ の中で彼は性について次のように書いている。

性は人間生活の中で非常に力強く有難く必要な刺戟であり、それが太陽の光のように我々の中を暖かく自然に流れるのを感じずる時、我々はすべて感謝する。<sup>40</sup>

又‘Sex Versus Loveliness’の中で「今や性と美とは焰と火のように一つのものである」と述べ、「性と美とは生命と意識のように不可分のものである」とも述べている。つまりロレンスにとって性は人間の意識の底を流れる根元的で本能的なものであり、それは美しさや暖かさと不可分のものなのである。ここに性を汚いものとしてタブー視した、従来のコンヴェンショナルな性に対する考え方との大きな違いがある。すなわちロレンスによれば、「我々の文明の大きな悲劇は病的に性を憎悪したことにある」のだ。そこにロレンスは現代社会の大きな病弊を見るのである。つまり「現代の男女の深い心理的な病気は直覚的機能の病める、退化した状態にある」のだ。直覚的機能とはすなわち性本能を意味し、それは意識を超えたものであり、焰のように燃えるものなのだ。「性の焰が消えた人間ほど醜いものはない」とロレンスは言う。なぜならば性の焰のないところに美は存在し得ないからだ。美は経験以外の何物でもないとロレンスは言う。そして「それは感じられる何か、輝きあるいは伝えられる素晴らしさの感覚」なのである。性のないところに美はあり得ない。「醜い顔をきれいな顔に変えるには、性の火が“delicately”にわきあがりさえすればよいのだ。」別の所でロレンスは又セックス・アピールのない顔は美貌とは言えないと述べ、ルドルフ・ヴァレンチノの顔よりチャーリー・チャップリンの顔の方が魅力的なのは、後者の方に「純粋な何かの輝き（“a gleam of something pure”）」があるからだと述べる。これをもってロレンスの性に対する考え方、美に対する考え方が従来のコンヴェンショナルな考え方と大きく異なることが理解されよう。

次にロレンスの猥褻に対する考え方を見てみよう。‘Pornography and Obscenity’の中でロレンスはポルノグラフィについて次のように述べている。

それでは結局ポルノグラフィとは何であるか？ それは芸術におけるセックス・アピールあるいは性的刺戟ではない。それは芸術家の側の、性的感情をかきおこし、興奮させようとの意識的意図でさえない。それらが率直で、こそこそしたり下司なものでない限り、性的感情それ自体には何らいけない所はない。正しい種類の性的刺戟は人間の日常生活にとって計りしれない価値を持つものである。それがなければ世界は灰色になってしまう。<sup>5)</sup>

すなわちロレンスによれば、性をえがくものがポルノグラフィではない。それが率直(“straightforward”)であり、こそこそしたり下司なもの(“sneaking or sly”)でない限り立派な芸術なのだ、というのである。それではほんとのポルノグラフィとは何かというと、ロレンスは次のように定義する。

まず第一に、真のポルノグラフィはほとんど常に“underworld”で表面に出て来ない。第二に、それが変わらずに性や人間精神を侮辱することによって、それと認識できる。

ポルノグラフィは性を侮辱し、それに悪意をもって危害を加え(“do dirt on it”)ようとする試みである。<sup>6)</sup>

つまりポルノグラフィとはopen worldには姿を見せずunderworldに隠れており、性や人間性を侮辱するものだということである。反対に率直にopen worldに出るものは、それがたとえ性を扱ったものでも、ポルノグラフィではなく立派な芸術だということだ。たとえば『チャタレー夫人の恋人』や『デカメロン』のような作品は後者であり、カサノヴァの回想録のような作品は前者に属する。

ロレンスによれば絵画の面でイギリスが他国に劣るのは、イギリス人に絵画的才能が乏しいからでなく、ルネッサンス以後のイギリス人が「恐怖という麻痺」にとりつかれたからだという。彼によればチョーサーはそうでないが、シェイクスピアやダンにも既にこの性生活への恐怖が見られ、以後王政復古期の劇作家、リチャードソン、スウィフト、ワーズワス、キーツ、シェリー、ブロンテ姉妹にもその傾向が見られると言う。そしてその恐怖の由来は、十六世紀の終

り頃に始まった梅毒に対する恐怖にあると言う。この梅毒に対する恐怖がイギリス人の意識に入り、それが“vital imagination”に打撃を与えたのだと言う。これはロレンス一流のドグマであって、その点を考慮しつつ読まねばならないが、性病への恐れがイギリス人のイマジネーションに打撃を与えたという見方は的を射ているかもしれない。以上は‘Introduction to His Paintings’<sup>7)</sup>で述べていることだが、再びポルノグラフィの問題に帰ろう。

ポルノグラフィは人間の裸体や性行為を醜く安っぽいものとする。その事はアングラで売られる書物についても言える。それらの書物はあまりに醜いので読者は吐き気をもよおし、あまりに馬鹿らしいので読者は、白痴か色狂人がそれを読んだり書いたりしているとしか想像できない。こういう現象は「文明の大崩壊（“the catastrophe of our civilisation”）である、とロレンスは言う。そしてポッカチオよりも『ジェーン・エア』やワグナーの『トリスタン』の方が、ずっとポルノグラフィに近いとロレンスは言う。『パメラ』や『フロス河畔の水車』や『アンナ・カレーニナ』にも同様の扇情性が見られるとロレンスは言う。性感情を憎み、それを恥かしめ、墮落させようという欲望をもった性的刺戟があるとすぐに、ポルノグラフィの要素が入ってくる。ポッカチオは今日のあらゆる人に読むように与えられるべきだ。性についての自然で新鮮なあけっぴろげは為になるからだと言ふとロレンスは言う。それではポルノグラフィが個人に与える影響は何か？ それはマスターベーションだとロレンスは言う。マスターベーションには恥と怒りと無益の感覚が伴う。そしてマスターベーションは一旦その習慣が出来てしまうと抜けられず、恋愛や結婚生活に入っても持続する。ロレンスのマスターベーションへの嫌悪は甚しく、「これはたぶん我々の文明の最も深く、最も危険な癌だ」とさえ極言する。マスターベーションには“loss”しかない。互いに与えあう“reciprocity”がないからだ。精力を消耗するだけで、お返しがないからだ。マスターベーションをやった後の身体は、ある意味で死骸だ。しかし男女の性行為においてはそうではない。彼等は性行

為において互いを殺しあうかもしれないが、マスターベーションのような“null effect”はない。我々はマスターベーションに伴う悪循環を絶対に避けねばならない。以上がマスターベーションに対するロレンスの見解である。ではその悪循環から逃れるにはどうすればよいか？ それは性を汚いものとして隠さないであけっぴろげさの中へ引き出すしかない。ロレンスは次のように絶叫する。“Away with the secret! No more secrecy!” つまり性を自然で率直なものとして開放することだ。しかしロレンスがそれによっていわゆる乱交（promiscuity）を意味したのでないことに、我々は注意しなければならない。彼が意味したのはあくまで一夫一婦の結婚であり、彼は結婚を“sacrament”と呼んで神聖視している。彼ほど乱交を憎んだ作家はいない。とかく誤解されがちなロレンスの名誉のために、私はこのことを強調しておきたい。

以上見てきたような誤った性への考え方は、前世紀、すなわちヴィクトリア朝から残ったものだとロレンスは考える。そして現代の若者の沈滞の原因は、第一に彼等が虚偽の考え方にとり囲まれて、性が流れないからだと言ひ、第二に彼等が解放されたにもかかわらず、依然としてセルフ・コンシャスなマスターベーションの悪循環にとり囲まれている」からだと言主張する。そして性について最も威張っている、最も解放されたボヘミアンたちでさえそうだと言う。彼等の性は算数よりも観念的になり、生きた肉体的生物としては彼等は幽霊よりも“non-existent”だときめつける。性についてあけっぴろげだとされているフランス人も、ロレンスにとっては、同じ非難の対象でしかない。そしてこうした誤った性に対する考え方を脱するには、第一に「我々の性と骨にまで浸みこんだ十九世紀の大きな虚偽と闘う」しかないと言ひロレンスは言う。そして第二には「自意識の冒険において、自己の限界に達し、自分を越えた何かを知らねばならない」と言ひ。自己を超えた何かとは「自己の内にある“the very urge of life”」を意味し、ロレンスの好きな無意識的なもの、the dark godに通じるものらしい。

現代の世界におけるすべての虚偽のうち最大のものは、純潔という虚偽と汚い秘密主義だとロレンスは言う。十九世紀から残されたこの虚偽が形をとって、言論界や文学やいたる所を支配したのが検閲である。この虚偽をうち破る者は世論の名の下に法律で罰せられる。しかし社会の中には少数派だけれど、その虚偽や虚偽を犯す者を憎み、ポルノグラフィや猥褻さに対してそれ自身のダイナミックな考えを持つ者もいることを、忘れてもらっては困るとロレンスは言う。まさに彼こそその少数派の一人だったのである。彼ほど大胆に性のタブーを破った作家は少いであろう。彼ほど敢然と検閲と闘った作家も少いであろう。

ロレンスが詩集 *Pansies* に附した序文 'Introduction to *Pansies*'<sup>8)</sup> には度重なる検閲を揶揄するようなシニカルな調子が見える。ここでは猥褻な言葉について論じているのであるが、言葉そのものは obscene ではなく、それを使う人間の考えが obscene なのだと述べて、次のように言っている。

私はとりわけいわゆる “obscene” な言葉を用いるとって非難される。“obscene” という言葉そのものが何を意味するか、または意味すべく意図されているか、誰もまったく知らない。しかし徐々に臍より下の肉体に属するすべての古い言葉は、obscene だと判断されるようになった。obscene は今日警官が諸君を逮捕する権利があると思うことを意味し、他の何物でもない。<sup>9)</sup>

これは官憲に対する全く辛辣な批判である。ロレンスによれば、言葉は観念や不純な観念的連想によって汚されたのであり、言葉そのものはきれいでも、観念が汚い連想を引きこみ、不快な感情を呼びおこすのである。従って観念を浄化すること以外に方法はない。臍から下の器官も目や鼻と同様に立派な自分の身体の一部だ。我々はヴォルテールの物語に出てくる貴婦人のように、その言葉の観念的排斥に合うように、自分の尻を切りとることはできない。自分自身のささいな嫌悪の犠牲となった人間こそ哀れだ。その嫌悪が拡大されて大きな恐怖となり、恐るべきタブーとなるのだ。ある言葉やある観念がタブーとな

り、それが襲ってくると我々はそれを駆逐することができず、死ぬか、墮落した恐怖で狂人になるかなのだ。そして我々のような大衆文明にとって、大衆の狂気ほど恐いものはないとロレンスは言う。タブーの結果は狂気だ。それを救うにはタブーを棚上げするしかない。ここにはいわゆる four-letter words の使用で、散々周囲や批評家から叩かれたロレンスの反較がある。そしてそうした言葉への嫌悪に毒されている一般大衆への警告がある。このエッセイがロレンスの死ぬわずか三ヵ月前の1929年のクリスマスに書かれたことを読者は考えてほしい。当時は『チャタレー夫人の恋人』における four-letter words の使用が囂々たる非難を巻き起こしていた時代であった。死の三ヵ月にロレンスがこのようなエッセイを書いたことに我々は驚かすにはられない。

最後に1929年秋に書かれた 'A Propòs of *Lady Chatterley's Lover*'<sup>100</sup> を見てみよう。ロレンスは最初この小説の海賊版が世界中の方々に現れて悩まされたことを述べ、問題の部分を削除した "expurgated" 版を作るようある出版社から頼まれたが断固それを断ったことを述べ、「しかし不可能だ！ 鋏で自分の鼻を切って整形するようなものではないか。本が血を流す」と述べている。彼はあくまで無削除版を固執したのである。彼はもはや我々はタブーの時代は超えたと述べ、男女の人たちが性を "fully completely, honestly and cleanly" に考えることを望むと述べ、それがこの本の主眼点だと言っている。そして今こそ性を理解すべき時だと述べ、いわゆる痺癢な言葉を用いるのは、それが「観念の肉体に対する意識の自然な一部だ」からだとして述べ、「観念が肉体を軽蔑し恐れ、肉体が観念を憎み抵抗する時に、猥褻が入ってくる」と主張する。そしてピューリタニズムのくさい物に蓋をする主義が性的倒錯を生んでいるのだと述べ、「肉体を恐れ、その存在を否定するところから若者は他の極端に走り、肉体を遊ぶ玩具、少々嫌な玩具のように扱い、しかし肉体が裏切るまではそれを楽しむのだ」と述べている。肉体と観念が調和を保ち、両者が互いを尊敬しあうところに人生は存在し得る。現代にはその調和がない。肉体は真の餓



え、乾き、歎び、怒り、悲しみ、愛、暖かさ、情熱、憎しみ、憎悪を感じる。ところが今日の多くの人々は豊かな感情的生活を持っているようにみえるけれど、ほんとの感情を持たずに生き、死んでゆく。今日の我々の感情的自我は真の存在を持たず、観念から反映されたものにすぎない。我々の時代ほどセンチメンタルで真の感情に欠け、偽りの感情を誇張している時代はない。我々にはにせの感情で間にあわしているが、その困る点は誰人も真に幸福に、真に満足し、真の平安を持ち得ないことである。今日ほど人と人との間に大きな不信がある時代はない。そしてにせの感情の下では真の性はあり得ない。今日ほど愛しながら男女の間に互いに対する激しい憎悪のある時代はない。愛におけるにせの要素は、個人の最も深い所にある性を狂わせるか殺す。我々が一つになれず、にせで真の愛のない今日は悲劇である。性に関する限り、我々白人の文明は生硬で野蛮で醜いほど殺伐としている。女の性がダイナミックな呼びかけを失なう時、女はもはや男を引きつける力がないと知るそれだけの理由で、男を引きつけようとする。真の性欲を感じられない男女は、にせの観念的な代用品を求める。父や夫としての可能性のある創造者・律法者であるという意識は、男が充実し満足した生を生きるためには、男の日常生活にとって必須のものである。真の性があるところには、その底を流れる忠実への熱情がある。以上のように述べた後、ロレンスは結婚で男女を結びつけるものとして、教会とキリスト教の重要性を力説する。牧師は独身であるが、ペテロやパウロの孤独な岩の上に建てられる教会は、結婚という不可分のものに據っている。結婚という絆・結婚という結びつきは、どちらへ行こうとも、キリスト教社会における根本的な結びつきのリンクである。教会は結婚を神聖なるもの（sacrament）性の結合により結ばれ、死によって以外分たれることのない男女の、神聖なものとするにより結婚を創りだした、とロレンスは言う。私はここにロレンスの人間としての生真面目さを認めなければならないと思う。結婚は彼にとって神聖なるもの（sacrament）であった。『チャタレー夫人の恋人』も彼の生真面目な

意図をもって書かれた作品である。この小説で彼が用いた four-letter words も決して痺猥な意味を含むものではない。

ロレンスはキリスト教による四季の行事のリズムの大切さに触れ、次のように述べている。

そしてそれは亦男と女の内的リズムでもある。受難節 (“Lent”) の悲しさ、復活祭 (“Easter”) の歓び、五旬節 (“Pentecost”) の不思議、セント・ジョンの焰、万霊節 (“All Souls”) のろうそくと墓、クリスマスの明かりのついた木。それらはすべて男女の魂の火をつけられたリズムックな情緒を代表するものである。<sup>91</sup>

そして結婚のリズムは一年のリズムに合うものであり、性は一年のリズムを経過するものであると述べる。そして続けて次のように言う。

おゝ、人間が自身を一年のリズムから、陽や土との結合から切りはなしたとは、人間にとって何たる不幸 (“catastrophe”) であろうか。陽の出・陽の入りから取り去られ、至点 (“solstice”) や春秋分 (“equinox”) の魔法の結びつきから切りはなされ、個人的な、単に個人的な感情にされたとは、何という不幸、何という愛の傷つきであろうか。<sup>92</sup>

ロレンスにとって、性や結婚は自然のリズムに従ってあるべきなのである。私は『虹』のマーシュ農場の、あの収穫の場面を想うかべずにはいられない。同時にロレンスの頭に描いていた結婚のあるべき姿もある程度想像ができるのである。こういう性のあり方こそまさしく『チャタレー夫人の恋人』で描かれたそのものではないか。ロレンスは言う。

根本的に永久的に男根的 (“phallic”) でない結婚。陽や土、月や星や惑星と結びつかない結婚、日のリズム、四季のリズム、一年・十年・世紀のリズムに合わない結婚、そのような結婚は結婚ではない。<sup>93</sup>

男の血と女の血は二つの永久に異なる流れであり、それらは生のすべてをと

り巻く二つの流れであり、結婚においてその輪が完全となり、性において二つの川が互いに触れ、互いを新しくする、とロレンスは言う。生への衝動は血の触れあい（“blood-contact”）なくして生じない。神経質な否定的反応ではなく、まことの肯定的な血の触れあいをなくして生じない。人間性に関する限り、結婚において男と女の血の流れが一つになることによって、宇宙が完成され、陽の流れと星の流れが完成される。男根（“phallus”）は男の神々しい活力と、直接の接触との唯一の偉大な古いシンボルである。大衆が上述の宗教的リズムを失なう時、その大衆は死に、希望はない。人間にとって最大の必要事は生と死の完全なリズム、太陽の年、肉体の生涯の年、より偉大な星の年、魂の不滅の年、のリズムを永遠に新しくすることである。我々はふたたび立ちあがるためには、観念的概念が始まった以前の、プラトン以前の、生についての悲劇的概念が起ったはるか以前に戻らなければならない。ロレンスはこのように言うのである。これは性が観念によって汚される以前の、男と女が裸かであった原始の時代の結婚を意味するものに外ならない。男と女が自然で無意識な性の衝動によって結ばれ、宇宙のリズムに従って生きた、古きよき時代の結婚を意味するのである。観念化され機械化された現代の結婚には人類を救う途はない。ロレンスはそう信じたのである。そしてそれを具体化したのが『チャタレー夫人の恋人』であったのだ。私はこの小説を *Sons and Lovers* に次ぐロレンスの傑作だと思う。そして英国近代小説の中でも屈指の作品であることを信じて疑わない。しかしこの小説が出版されるや喧々囂々の非難と好色的好奇心の的となったのはきわめて自然であった。当時はヴィクトリア朝のモラルが旧態依然として残っていたからである。先述した “A Propos of *Lady Chatterley's Lover*” をロレンスを書いたのも、彼が少しでもこの小説が当時の読者に正しい目で読んでもらいたいと思ったからに外ならない。しかし彼が死ぬ1930年前には、この小説の偉大さを理解した人はごく一部であった。わが国でも伊藤整訳のこの小説が1950年裁判になった時、小山書店は罰金を課されたのである。

この小説の真価が認められるにはロレンスの死後三十年を経なければならなかった。

## (2)

『チャタレー夫人の恋人』をめぐる検察側と被告側であるペンギン・ブックス社の裁判は、ロレンスの死後三十年の1960年十月二十日から六日間にわたって行われた。弁護側が錚々たる証人を多数立てたのに対し、検察側は一人の証人も呼ぶことができなかった。筆者は C. H. Rolph (ed): *The Trial of Lady Chatterley*, 1961 (Penguin Books Limited) によってその裁判の模様を回想することにしたい。

第一日、十月二十日。まず主任検察官の Griffith-Jones が立って、ペンギン・ブックス社が D. H. ロレンス著『チャタレー夫人の恋人』を英国で初めて出版しようとしているが、猥褻の罪で起訴する旨を宣言する。そして1959年に改定された猥褻出版物禁止法 (Obscene Publications Act) を朗読し、過去に猥褻として起訴された判例を挙げ、検察側が陪審員に問いたいのは、この小説が読む人の心に好色な考えを想起させるものであるか、この小説が乱交的不倫的性行為を崇拜するものであるか、官能性を賞揚するものであるか、思想や言語の野卑、俗悪性を助長するものであるか、一般読者を墜落させる (“deprave”) ものであるか、自分の妻や子女・召使が読むことを賛成できるものであるかという点であると述べ、“deprave” の語義を辞書を引いて説明し、陪審員がこの小説が obscene であるという決論に達したならば、その出版が「文学・芸術・科学・学問その他あらゆる問題のためになるものとして大衆の利益に合うものであるか」という点であると述べる。それから『チャタレー夫人』の梗概を説明し、この小説には性行為の描写を除けば何もないと言う。そしていわゆる four-letter words がそれぞれ何回使われているかを数えあげ、この小説を起訴することは自分の義務であり、使命であると述べて冒頭陳述を終る。これに答えて弁護側の Gerald Gardiner はペンギン・ブックス社が今日の繁栄をみ

るに至った経移を説明し、1959年における Obscene Publications Act の改正の理由を述べ、その趣旨はポルノグラフィに関する法の権威を強化すると同時に、文学を保護する点にあったと論じ、ロレンスの真の意図は愛に基づく男女の結合の重要性にあったことを説き、次のように言う。この本は決して猥褻ではない。出版すれば大衆のためになる本である。ロレンスが今世紀最大の作家であることを否定する人はほとんどあるまい。彼の死後彼の作品について約八百冊の本が書かれており、彼の作品は世界中で売られている。彼が伝えんとしたメッセージは、今日のイギリス社会は病んでおり、それは機械時代のためであるというのだ。又肉体を犠牲にして観念が強調されたためである。我々のなすべきことは人間関係、特に愛による男女の関係をうち立てなおすことである。彼がこの作品においてしばしば用いる four-letter words は、ヴィクトリア朝以来つきまとっていた恥かしいという connotation からそれらを陽の光の中へ引きだすためになされたのだ。以上のような Gardiner の最初の弁論が終って、裁判官は十二人の陪審員に、この小説を陪審員室で読んでおくように指示して閉廷する。

第二日、十月二十七日。最初の証人はケンブリッジ大学クライスト・コレッジの英文学講師兼フェロウのグラハム・ハウ氏である。彼は Gardiner の質問に対しロレンスの英文学上の地位について、「彼は今世紀の最も重要な小説家の一人で、如何なる世紀の最も偉大な小説家の一人と一般に認められる」<sup>90</sup> と答える。この小説をロレンスの作品中どう評価するかという質問に対して、「彼の小説中ベストだとは思わない。しかし最悪だとも思わない。……五番目ぐらいに置きたい」<sup>91</sup> と答える。この小説は乱交的不倫的性行為を崇拝するものと言われているが、どう思うかとの質問に対して、はっきりと否定する。この小説にはさまざまな性行為のみが描かれているといわれるが、どう思うかとの質問に対して、「そうは思わない。くりかえし性的場面が描写されている理由は、コニー・チャタレーの自分の本性に対する自覚が発展するのを示すため

である。……これはロレンスの目的の非常に重要な部分である』<sup>106</sup> と答える。four-letter words がこの本のテーマにどれぐらい必要であるかとの質問に対して、「ロレンスの考えでは性的な事柄を語るのに適当な言葉がない。……彼はこの事が性に対する秘密めいた病的態度になると考えている。彼は性がおおびらに尊敬をもって論じられる言葉を見出そうと願っている。そのために彼は通常卑猥とされている言葉を救おうとしているのだ』<sup>107</sup> と答える。次に Griffith-Jones が反対尋問に立ち、——小説の内容にあたって、Katherine Anne Porter や Mark Schorer などの批評を引用して質問するが、グラハム・ハウ氏の答弁は冷静で当を得たものである。

二番目の証人としてオックスフォード大学のルネッサンス英文学の reader であり、British Academy のフェロウであり、T. S. Eliot, John Donne, などに関する多数の著書をもつ、ヘレン・ガードナー女史が立つ。<sup>108</sup> Gardiner の英文学上におけるロレンスの立場の質問に対して、彼女は二十世紀の最初の六十年をとれば、彼は今世紀の最大の作家六人の中に入ると答える。Gardiner の、検察側が問題とする four-letter words とこの作品の関係についての質問に対し、彼女は言葉はその用いられる意味やコンテキストによって野卑にも不快にもなるのであり、この小説の場合ロレンスは性行為が恥かしいものでないことを我々に感じさせるために用いたのだと思うと答える。この時 Griffith-Jones がロレンスは偉大な作家であったか、この本は彼の最大の本の一つと思うかと質問を発する。ガードナー女史は第一問に対してはイエス、第二問に対してはノー、しかし最大の本の要素を持っていると答える。最大の要素とはどの部分かという Gardiner の質問に対し、彼女はどの場面とどの場面というように例をあげて答える。

次にケンブリッジ大学の英文学講師であり、ガートン・コレッジのフェロウであるジョン・ベネット女史が証人に立つ。<sup>109</sup> Gardiner のこの本は乱交的不倫的性行為を崇拝していると言われるがとの質問に対し、彼女はその逆だと答

える。又文学的観点のみから見て、この本を読むことは若い学徒にとって教育的かという質問に対して、イエスと答える。Griffith-Jones が反対尋問に移り、いろいろと質問するが、期待するような答弁は得られない。

次に証人として立つのはデйм・レベツカ・ウェストである。この本は乱交的不倫的性行為を崇拜するものだと言われるがとの Gardiner の質問に対し、彼女は「ロレンスは良い結婚こそたぶん世界で最も重要なことだと考えていた」と答える。Griffith-Jones は “No questions” と反対尋問を放棄する。

次に証人台に立つのはウーリッジの僧正で、ケンブリッジ大で哲学の博士号を取ったドクター・ジョン・ロビンソンである。Griffith-Jones が反対尋問に立って、この本は倫理面で価値ある本であると思うかと質問する。これに対してロビンソン博士は、倫理的観点からみてこの本の肯定的価値は、この作品が人間関係の真の価値および誠実さを強調した面であると答え、教育的価値のある本だと答える。キリスト教的立場から読まれるべき本だと思うかの質問に対して、そうだと思うと答える。

次の証人はノッティンガム大学英文学教授であるヴィヴィアン・ビントウ博士である。あなたは学生にロレンスを読むよう勧めたかとの質問に、彼はいかにもと答え、彼は二十世紀の英国の最大の作家の一人だと答える。彼は検察側の挙げたいくつかの章句にコメントを加え、性行為の描写がロレンスの言わんとしたことにとどの程度必要かという質問に対し、絶対的に必要と答え、その理由を適切に述べる。この作品は性行為のヴァリエーションのみから成っているという意見があるがと質問されたに対し、彼はノーと答えその理由を述べる。four-letter words はロレンスの言わんとしたことと必要かとの質問に対し、そうだと思うと答える。反対尋問で Griffith-Jones から Middleton Murry 著の *Son of Woman* を読んだかと訊かれ、それは知っているが、不満足な本だと答える。

次にペンギン・ブックス社の支配人サー・ウィリアム・エムリス・ウィリア

ムズ, *The London Churchman* の編集者で Industrial Christian Fellowship の総裁の聖職者 A. スティーヴン・ホプキンソン, レスター大学の Semion Lecturer のリチャード・ホガート氏が証言に立つ。ここで注目すべきは, キリスト教の聖職者の A. スティーヴン・ホプキンソン氏がキリスト教の観点からこの作品をどう思うかと訊かれ, これは道徳的目的をもった本であると答え, 道徳的観点から著者がこの本を読むことに反対するかと尋ねられたのに対し, ノーと答えていることである。『チャタレー夫人』のような作品に頑固に反対すると想像される牧師までがこの作品を理解したのだ。

紙数の都合上三日目からは証人の肩書と名前だけを記すに留める。スティーヴニッジのアレイン・グラマースクールの校長フランシス・克蘭マーツ氏。キーリー女子グラマースクールの古典学教師, サラ・ベリル・ジョーンズ嬢。歴史・生物学者の C. V. ウェッジウッド氏。 *Daily Herald* の元編集者フランシス・ウィリアムズ氏。作家の E. M. フォースター氏。国会議員のロイ・ジェンキンズ氏。 *New Statesman* 誌の文芸編集者ウォールター・アレン氏。 *Harper's Bazaar* 誌の編集者アン・スコット・ジョーンズ嬢。ロンドン大学の英文学・歴史・ラテン語の博士ジェームズ・ヘミング氏。

四日目, オックスフォード大学 Extra-Mural Delegation のスタッフ・チューター, レイモンド・ウィリアムズ氏。弁護士でオックスフォード・ケンブリッジ大学の修士ノーマン・セント・ジョン＝スティーヴァス氏。 *Sunday Times* 誌の J. W. ランバート氏。ペンギン・ブックスの創設者サー・アレン・レイン。法学院のマスター, キャノン・ミルフォード。リヴァプール大学英文学に席をもつケネス・ミュワー教授。アレン&アンウィン社の社長サー・スタンレー・アンウィン。 *Sunday Times* 誌のディリス・パウエル嬢。詩人でありオックスフォード大学詩学教授 C. デイ・ルイス氏。ロンドン大学の英文学講師を十二年間勤めたスティーヴン・ポッター氏。最近まで *New Statesman* 誌の文芸編集を勤めたジャネット・アダム・スミス嬢。ケンブリッジのキングス・コレッ



ジの学寮長であるノエル・アナン氏。バーミンガム教区の宗教教育長のドナルド・ティツラー師。文学批評家ジョン・コネル氏。ヨークシャー・ポスト紙の編集者に任命されたばかりのC.K. ヤング氏。Guardian誌の編集者のヘクター・ヘザリング氏。ローマ・カトリック教の家庭に育ったバーナダイン・ウォール嬢。

以上のような証人が次々と立って表現や程度に多少の違いはあれ、皆『チャタレー夫人』を支持する証言を行なう。質問の要旨は大体次の六点に集中する。(1)この本はimmoralであるか？(2)この本のliterary meritはあるか？(3)four letter wordsについて？(4)この本は乱交的不倫的性行為を崇拝するものか？(5)この本は一般読者が読んでさしつかえないものか？(6)この本はobsceneな本であるか？証人の証言はすべて弁護側に有利なものであった。Griffith-Jonesは初めの頃は反対尋問に立って質問していたが、次第にその意欲を失い、尋問を止めるようになる。

かくて五日目には検察側の最終陳述と弁護側の最終弁論と裁判官 Justice Byrnes の要約が行われ、六日目に陪審員圧倒の多数の「無罪」判決が出てこのエポック・メイキングな裁判は終るのである。C. H. Rolph (ed) : *The Trial of Lady Chatterley*はこの裁判の模様を詳細に伝えている。かくしてロレンスの性・猥褻・ポルノグラフィについての考えは、彼の死後三十年にしてようやくその正しさが認められたのである。

註 (1) Cf. Harry T. Moore (ed) : *Sex, Literature and Censorship; Essays by D.H.Lawrence* (Heinemann), 1955, pp.1-38.

(2) *Ibid.*, pp.121-127.

(3) *Ibid.*, pp.195-222.

(4) *Ibid.*, p.201.

(5) *Ibid.*, p.202.

(6) *Ibid.*, p.203.

- (7) *Ibid.*, pp.143-194.
- (8) *Ibid.*, pp.128-133.
- (9) *Ibid.*, p.129.
- (10) *Ibid.*, pp.223-269.
- (11) *Ibid.*, p.250.
- (12) *Ibid.*, p.251.
- (13) *Ibid.*, p.252.
- (14) C.H.Rolph (ed) : *The Trial of Lady Chatterley* (Penguin Books), 1961, p.42.
- (15) *Ibid.*, p.42.
- (16) *Ibid.*, p.44.
- (17) *Ibid.*, p.44.
- (18) *Ibid.*, pp.58-61.
- (19) *Ibid.*, pp.61-65.